
僕と家出とあの手紙

森野カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と家出とあの手紙

【Nコード】

N3151Z

【作者名】

森野カエル

【あらすじ】

今日、僕達は家出するのだ。

(自サイトより)

「プハアーツ」

一杯の牛乳を飲み干し、テーブルの上にコップを置く。
健太はあらためて気合いを入れた。

「ねえ、お兄ちゃん。本当にするの？」

今年、幼稚園に入った二歳下の弟の亮太が、リュックを背負いながら、心配そうな顔で聞いてくる。

「当たり前だろ」

今日、僕達は家出をするのだ。

健太に家出を決心させた出来事は、今日の朝まで遡る。

クリスマスパーティーの為に、母親と健太と亮太の三人でパーティーの用意をしていた。

そこに、健太の大嫌いなあの音があったのだ。

「はい、市橋です」

ポケットから携帯電話を取り出した母親は、すぐに電話に出る。

「はい、はい・・・」

お母さんはこの音が鳴ると、他の事をほったらかしにして電話に出る。

ご飯を食べてても。

掃除をしてても。

僕と亮太と遊んでても。

だから僕は僕のお母さんを独り占めにする、この携帯電話が大っ嫌いだった。

「・・・ええ！はい！それで・・・」

これはいつものパターンだった。

お母さんが電話に出る。

しばらく話してお母さんが驚く。

で、お母さんが電話を切る。

すると、お決まりの一言を僕と亮太に言うのだ。

母親は電話を切ると、素早くエプロンを外した。

「ごめんね。健太、亮太。お母さんね、ちょっと会社に行かなきゃならなくなったの」

やっぱりだ。

健太は俯いた。

テーブルの上を慌てて母親が片付け始める。

「今日はお父さんがいるから、お父さんと一緒に良い子でお留守番しててね」

片付けを全て終わらせると、母親はリビングを出ていった。

「お兄ちゃん、パーティの準備は？」

僕よりも小さい亮太には、これがどういいう事かわからないのだ。

「おしまいだつて」

「おしまい？何で？僕まだしてたい」

「おしまいはおしまいなの！」

僕だつてまだしてたかった。

「え〜っ。まだしたい〜っ！」

「うるさい〜！」

健太が怒鳴ると亮太はピタリと黙った。

そして、めそめそと泣き始めた。

僕は悪くない。

健太は亮太に背を向けてイスに座る。

そこに母親が戻つて来た。

スーツと家にいる時よりも濃い化粧をして、すっかり仕事に行く格好になっていた。

「もう、健太！亮太と仲良くしなきゃ駄目でしょ〜！」

その母親の言葉に、健太はプイツと横を向いた。

「お母さん行つてくるね。たぶん、晩ご飯までには帰れると思うか

ら

そう言って、母親は慌ただしく出ていった。

「嘘つき」

健太はぼそりとつぶやく。

今までそう言って、晩ご飯に間に合った事はなかった。

亮太の泣く声だけが部屋に響く。

健太は居心地が悪くなり、オモチャ箱のある部屋へ移動しようとして立ち上がる。

と、そこに、二階から電子音が聞こえてきた。

健太はその音に一瞬びくりとする。

じつと聞き耳をたてていると五回目まで音は止まり、しばらくすると二階を走り回るような音が聞こえてきた。

健太は嫌な予感がした。

階段を走って誰かが降りてくる。

お父さんだ。

「健太！亮太！すまないが、お父さんはこれから仕事に行くことになった」

嫌な予感は当たった。

「お母さんには、晩ご飯までには帰って来るって伝えといてくれ」

「お父さ・・・」

「それじゃあ、行ってきます」

父親はあつという間に家を出ていった。
母親が仕事に行ってしまった事を、伝える暇もなかった。
これで、健太と亮太の二人だけになってしまった。
亮太もいつのまにか泣き止み、部屋が静まりかえる。

「お兄ちゃん・・・」

二人きりになって心細くなったのか、亮太が健太に近寄る。

いつも、いつもそうだ。

こうやって、お母さんもお父さんも約束を破る。

僕の誕生日も。

亮太の誕生日も。

お祝いをするって言って、お仕事でダメになった。

小学校の入学式も。

授業参観も。

来るって言って、お仕事で来なかった。

健太は俯く。

クラスの透君も達哉君も、今日はお母さんとお父さんとおいしい物を食べる、って言ってた。

なのに、僕のお母さんとお父さんは、また仕事・・・。

「きつと、お母さんもお父さんも、僕達の事はどうでもいいんだ」

きつと、そうだ。

そくに違いない。

僕達はお母さんにもお父さんにも嫌われてるんだ。
だから、いつも僕達をおいて行っちゃうんだ。

「亮太」

「何？お兄ちゃん」

また泣き出しそうな顔で、亮太は健太を見上げる。

「家出しよう」

お母さんもお父さんもいない所で、僕は亮太と二人で暮らすんだ。

日はすでに暮れ、健太と亮太は暗い街中を街灯と民家の灯りを頼りに歩いていった。

ポストまで来ると、健太はリュックからハガキを出した。微かな灯りで、ハガキに切手が貼ってあるのを確認する。

「よし！」

手を伸ばして、健太はハガキをポストに投函した。

健太と亮太が家出した事がハガキには書かれている。

子どもがいなくなり、警察が子どもを探し出すのを最近のテレビで見た。

僕達がいなくなって警察に探されたら大変だから、手紙で探す必要はない事を伝えるのだ。

実際には子どもが誘拐されるドラマだったのだが、健太には違いなどわからない。

「よし、亮太！行くよ」

リュックを背負い直し、駅に向かう。
これから電車に乗って、どこか遠い所で亮太と暮らすのだ。
歩き出す健太の服の裾を掴み、亮太が小走りに続いた。
人気のない暗い道を行く二人に、気付く者は誰もいない。

それから、どのくらい経っただろうか。

3時間か5時間か。

いや、1時間も経っていないだろう。

健太と亮太は電車に乗って何処かに行くどころか、街の警察署にいた。

机がたくさんある部屋の黒いソファに座らされ、健太はずっと俯いている。

その隣では警察署に着く前から泣いている亮太が、いまだに泣いていた。

「お母さんとお父さんはもうすぐ来るからね」

ずっと一緒にいる婦警さんが、泣いている亮太をあやすが泣き止む様子はいつこうにない。

出されたジュースも、健太と亮太は手をつけなかった。

「大丈夫だよ。すぐに来るからね。それまで何かして遊んでいようか？」

まったく答えない二人に、婦警はため息を吐いた。

絶対に来ない。

来るわけがないんだ。

健太は唇を噛んだ。

嫌いな僕達を、迎えに来るはずがない。

きつと今頃、僕達がいなくなっただけでせいせいしたって喜んでるはずだ。

瞳の奥から何かが目覚め、健太はぐっと堪える。

自分をこまかすために、ジュースを飲もうと手を伸ばした時、廊下からバタバタと走ってくる足音が聞こえてきた。

ピタリと健太は止まる。

「ああ、お母さん達が来たみたいね」

婦警はあからさまに安堵し、立ち上がって扉に向かう。

違う。

健太は思った。

来るはずがない。

健太は扉を凝視する。

きつと、違う誰かだ。

婦警がノブを掴み、扉を開く。

それが、とてもゆっくりだと健太には感じた。

実際にはもつと早かっただろう。

しかし、健太には開くスピードがスローモーションのように感じられた。

ゆっくりとけれど確実に開く扉。

きつと、いない！

健太はぎゅつと目をつぶる。

「うわーん」

いきなり大声で泣き始めた亮太の声が、部屋中に響き渡る。その泣き声の中に、健太がいつも聞いている声が混ざっていた。

「亮太！心配したんだから！」

「お母さああん。うええん」

「良かった、亮太！無事だったんだな！」

お母さんとお父さんだ。

「健太は？健太はどこ？健太？」

お母さんが僕を呼んでる。

しかし、母親達が入って来るのと同時に、健太はソファの後ろに隠れ、その場にうずくまっていた。

「健太は一緒にはいなかったんですか？！」

母親の心配そうな声が聞こえる。

でも、健太はソファの後ろから出る事が出来なかった。

「いいえ。一緒にいましたよ。ソファと一緒に座っていたんですけど……」

健太が隠れる所を見ていなかったのか、婦警は戸惑っている。

「健太？健太どこなの？！」

母親の声に、健太はソファの陰から扉の方をそろりと覗く。

母親は亮太を父親に抱っこさせている所で、亮太が父親にぎゅっと抱きつくとキョロキョロと周りを見始めた。

「何で勝手に外に出たんだ？」

泣きじゃくる亮太に、父親が聞く。

「お、お兄ちゃんっが、家っ、出しよって」

「健太が？」

「うん」

しゃくり上げながらも亮太が答えてしまったので、健太は余計にソファの後ろから出られなくなってしまった。

亮太の裏切り者！

また、ソファの後ろに隠れようと健太が顔を引っ込めようとした時、母親と目が合った。

「健太！」

すぐにソファの後ろに健太は隠れた。

怒られる！

ぎゅっと目をつぶり、とっさに両手で健太は頭をかばう。

しかし、健太が思っていた痛みはやってこなかった。

代わりにふわりとした暖かさが、健太を包んでいた。

そっと目を開けると、健太は母親に抱き締められていた。

「無事で良かった・・・」

戸惑いながらも手を母親の背中に回し、健太は抱きつき返した。

「お母さん……」

ポロポロと健太の涙が溢れる。

ずっと我慢していた健太は、母親の胸の中で大声で泣き続けた。

家出は大失敗に終わったが、健太にはもうどうでも良くなっていた。警察署からの帰り道。

健太と亮太は泣き疲れてしまったのか、母親と父親の背中であぐさりと眠りについていた。

目が覚めた時には、健太は家のベットのの中にいた。

今日の事を、健太はゆっくりと思い返す。

家出は上手くいかなかったけど、健太は満足していた。

「また、家出してみようかな」

今日みたいに、リュックとか手紙とか用意して……。

「あーっ!!!!」

急に大きな声を健太は出した。

「……ん？どうしたの？お兄ちゃん」

同じ部屋に寝ていた亮太が、健太の声に目を覚ます。

「忘れてた！どうしよう！」

「お兄ちゃん？」

亮太の呼び掛けに気付かず、健太は一人で頭を抱え込む。

「もう、何なの？」

全く答えてくれない健太に、亮太は諦めたのかもう一度眠りについた。

「と、とりあえず、明日は早く起きよう」

それで、お母さん達よりも先に……。

早起きする事に決めた健太は、布団を頭までかぶり無理やり眠った。そして、次の日の朝。

「お兄ちゃん、何してるの？」

新聞を取りに来た亮太が、玄関前の郵便受けの所に健太が震えながら立っているのを見つけた。

「ま、待つてる。手、紙」

手足は冷え、まともに口を動かす事さえ出来ない健太には、そう答えるだけで精一杯だった。

「寒くないの？家の中で待てば良いのに」

顔をぶるぶると健太は横に振る。

家の中にいて、先にお母さん達に手紙を見られたら大変だ。

郵便配達の人 came たらすぐに受け取って、健太は手紙を隠すつもりでいた。

「誰から来るの？」

昨日出した手紙の事を、どうやら亮太は忘れてしまったようだ。もう答える事も億劫で、健太は黙っていた。

答えてくれない健太に亮太はむっとし、郵便受けから新聞を取り出すと舌をべーっと出して家の中に入っていった。

亮太の態度に健太もむっときたが、今は亮太を追っかけている場合ではない。健太は空を見上げる。

晴れていた昨日とは違いどんよりとした雲が広がり、今にも雨が降りそうだ。

降るなよ。

そう思った瞬間、健太の頬に冷たい何かがあたった。

じっと空に目を凝らすと、白い物がちらほらと落ちてくるのに気が付いた。

「雪だ……」

普段なら飛び跳ねて喜ぶ健太だが、全く嬉しくなかった。

「寒い……」

昨日投函した手紙は、今だ来ない。

翌日、健太はまた両親の愛情を噛み締めていた。

朝には父親がお土産の約束をしてくれたし、今は母親が健太の側にいる。

嬉しかった。

これがベッドの上で苦しみながらでなければ……。

結局手紙は届かず、一日中外にいた健太は風邪をひいたのだ。

熱を出し咳は止まらず、目眩がして立つことすらままならず、それから健太は寝込み続けた。

もうろうとした頭で健太が考えたのは、もう家出はしないということだった。

一週間後。

ようやく熱がひいた健太は、改めて疑問に思っていた。

「あの手紙はどこへ行ったんだろう？」

健太の手紙は宛先と返送先が解読不明として、郵便局に取り残されていた。

そのことを健太は知るよしもない。

end

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151z/>

僕と家出とあの手紙

2011年12月11日00時02分発行